



「ミネアサヒ」を改良し、病気に強い「中部138号」を開発

(平成29年6月品種登録出願公表)

本県の中山間地域で栽培される水稻品種「ミネアサヒ」は食味が良いことから人気が高く、県内の約1,500haで栽培されています。しかし、夏に冷涼な地域で発生しやすい「いもち病」に弱いいため、病害抵抗性の改良が要望されていました。そこで農業総合試験場では「ミネアサヒ」の食味や早晩性など

の特性はそのまま、イネの重要病害であるいもち病と縞葉枯病に抵抗性をもつ水稻新品種「中部138号」を開発しました。

「中部138号」は、病気に強い「ミネアサヒ」として、これまでのブランドを受け継ぐことが期待されています。生産者への種子供給は平成32年度から開始の予定です。
(山間農業研究所)

多収性水稻品種「もみゆたか(愛知125号)」の栽培法の確立

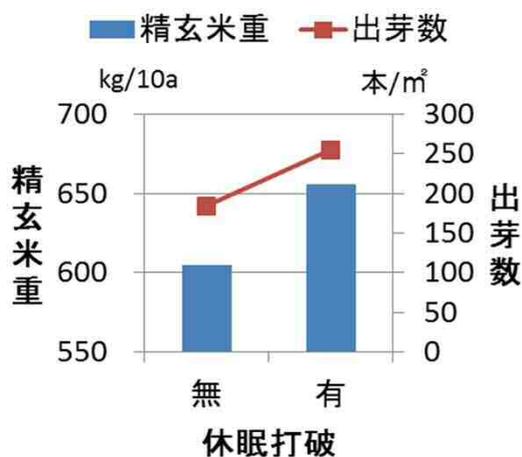


「もみゆたか(愛知125号)」の草姿



穂の写真

上:「もみゆたか(愛知125号)」
下:「あいちのかおりSBL」

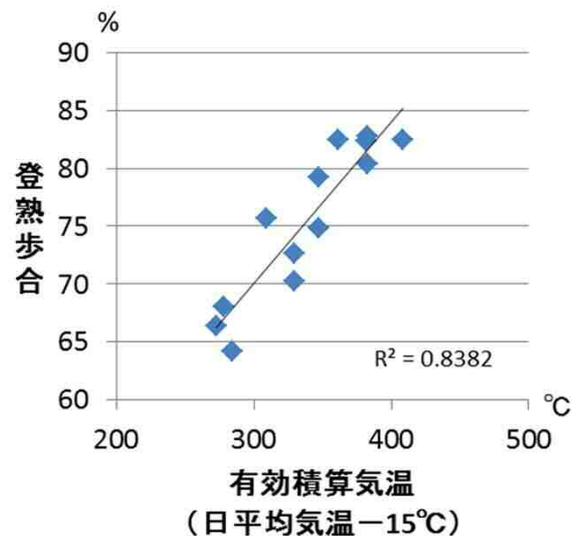


不耕起V溝直播における休眠打破の効果
*50℃で5日間処理

「もみゆたか(愛知125号)」は一般の主食用品種に比べ穂長が長く、収量性が高いため、飼料用米として普及が進んでいます。そこで、安定的に高い収量を得るための栽培方法を確立しました。

高収量を確保するために肥料を多くし、移植栽培では12gN/10a、不耕起V溝直播(以下、V直)では15kgN/10aとします。

本品種は種子休眠性が強いため、V直



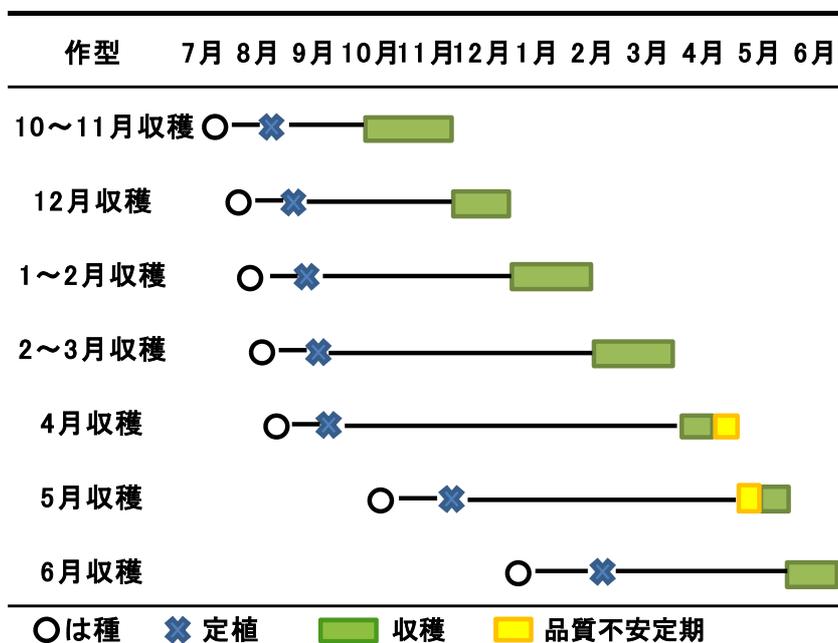
登熟期の有効積算気温と登熟歩合の関係

では、あらかじめ種もみの休眠打破処理を行うことが必要です。これにより出芽率が高まり、収量も増加します。

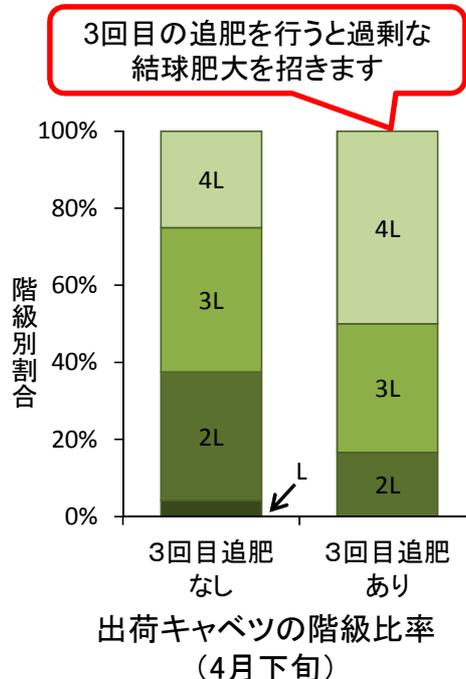
出穂から登熟までの有効積算気温と登熟歩合には高い相関があり、日平均気温が15℃以下になると登熟が進まなくなります。収穫までに十分登熟させるためには、遅くとも、移植栽培で5月中に移植、V直では4月中に播種することが必要です。

(作物研究部)

4月収穫キャベツの安定生産技術を開発



収穫時期に合わせた作型



定植:9月下旬、1回目追肥:11月上旬
2回目追肥:12月下旬、3回目追肥:2月下旬

4月に収穫するキャベツは、春に花茎が伸長し品質が低下するため、栽培が難しい作型です。また、4月下旬に収穫する場合は、結球が大きくなりすぎて、市場価値が低下します。そこで、この時期のキャベツに適した定植時期と追肥方法を明らかにしました。

定植は9月末までとすることで、葉数が多く、花茎の伸長が小さいキャベツを収穫することができます。また、2回目の追肥

を12月下旬に行い、その後の追肥を行わないことで、3月までの生育を確保しつつ4月以降の肥効を抑制し、過剰な結球肥大を抑えることができます。

これらの技術により、4月収穫キャベツの安定生産が可能になりました。10月から翌年6月まで安定して生産できるよう、現在、さらに5月収穫作型の生産技術の開発に取り組んでいます。

(東三河農業研究所)

研究トピックス

飼料用米の栽培に必要な水量

栽培面積が年々増加している飼料用米は栽培期間が長く、生育・収量も多いため、農業用水需要量への影響が懸念されます。研究の結果、かんがい日数が長いこともあり飼料用米の必要な全水量は主食用米比117%、1日当たり104%でした。

引き続き、飼料用米として当场で開発した「もみゆたか(愛知125号)」について調査中です。(環境基盤研究部)



左：主食用米、右：飼料用米

生育時期別の必要な水量の比較

試験区	移植期～	※1	※2	※3	全生育期間	かんがい
	幼穂分化期	～出穂期	～登熟期	全生育期間		
	m/10a	m/10a	m/10a	m/10a	mm/日	日
飼料用米 (モミロマン)	46	669	261	976	7.9	124
主食用米 (ゆめまつり)	44	552	239	834	7.6	110
飼料/主食(%)	106	121	109	117	104	

※1 モミロマン 6/13～7/25(43日)、ゆめまつり 6/13～7/25(43日)
 ※2 モミロマン 7/26～8/31(37日)、ゆめまつり 7/26～8/25(31日)
 ※3 モミロマン 9/1～10/14(44日)、ゆめまつり 8/26～9/30(36日)

バラの日持ち性は 収穫後20分以内の水揚げがポイント

バラは、切り花の収穫から水揚げまでの時間が短いほど、日持ち性が良いとされていますが、具体的な時間は明確になっていません。そこで、夏季における収穫から水揚げまでの時間がバラの日持ち性に及ぼす影響を検討しました。その結果、収穫後20分以内に水揚げすることで、日持ち性の低下を抑制できることがわかりました。(園芸研究部)



10分 20分 30分 60分
収穫から水揚げまでの時間

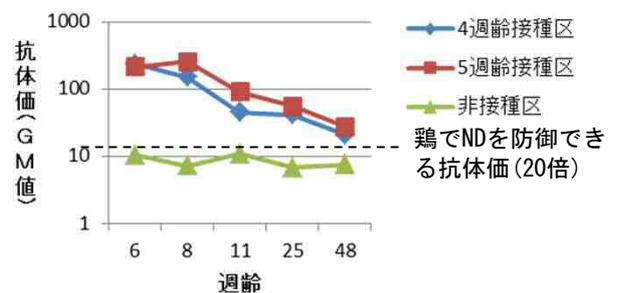
収穫から7日目のバラの様相

(日持ち試験の保管温度は25℃、糖を含む品質保持剤の使用無し)

本研究は「H27花き日持ち性向上対策実証事業」で実施しました。

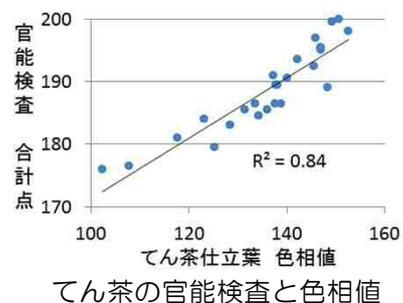
ウズラのニューカッスル病(ND) オイルワクチンは4週齢接種が有効

ウズラの生産現場では、オイルワクチンは接種ストレスへの懸念からあまり普及していません。一般的なワクチン接種時期の5週齢は産卵開始時期と重なるため、より若い4週齢で接種し、ストレス軽減の可能性を検討しました。その結果、5週齢接種のような接種後の沈鬱症状も見られず、産卵終了の48週齢時まで高い抗体価を維持できました。(畜産研究部)



スキャナーとフリーソフトを利用し てん茶の色を簡易に測定できます

食品加工用てん茶は濃緑色が高品質とされますが、簡易な色調測定機器がありませんでした。そこで、スキャナーとフリーソフトを利用し、てん茶の色を数値化する方法を確立しました。これで得られる色相値(色合い)は、品質評価に一般的に使われている官能検査と相関が高く、生産現場での活用が期待されます。(東三河農業研究所)



研究短報 第119号

編集・発行 愛知県農業総合試験場

〒480-1193 愛知県長久手市岩作三ヶ峯1-1

TEL 0561-62-0085 内線322 (企画普及部)

FAX 0561-63-0815

<http://www.pref.aichi.jp/nososi/>